

リレーおびにおん

「中の上」受け継がせる手段

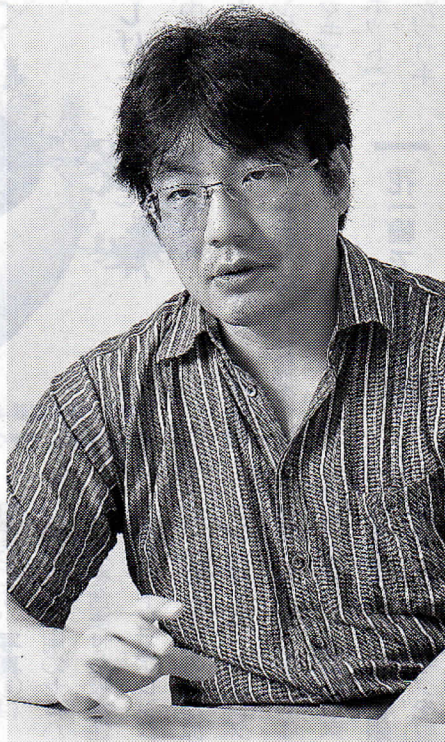
アップダウンの激しい経歴なんですよ。小学4年から受験勉強をして、1977年に開成中学に合格しました。そこで気を抜いたら、中学の3年間、成績はクラスの最下位。中3の秋に「もう1回、中3をやるか、別の学校へ行くかどちらかにしろ」と通告されました。こりゃもうダメだと思って、東京・小平にある錦城高校の2次募集を受け、なんとか引っかけたんです。

当時の錦城は、大学に行くのが学年の半分程度。そこで苦手だった数学や物理を勉強し直すと、今度はすらすらと頭に入る。伸び伸びしているか、劣等感の塊になっているかで、人間の能力って50%は違ってくる。開成から放り出されたという烙印を押されたまま一生を送りたくないと思ひ、高2から東大受験を意識して、1浪して錦城からは初の東大合格者になりました。

こうして大学に入ったら、またも

子どもと受験①

開成から落ちこぼれて東大を卒業した
マージャンライター



＝東京都渋谷区、横関一浩撮影

ふくち まこと
福地 誠さん (45)

や中学のときと同じパターン。語学とか落としまくって留年を繰り返しました。就職に失敗した後はマージャンにはまり、奮闘でバイトしながら毎日ひたすら打ってましたね。大学8年目に「できちゃった結婚」をして、さすがに就職しなきゃならな

くなった。卒業して、かろうじて入ってくれた出版社でマージャン雑誌の編集を3年やり、その後はフリーライターと編集者をやっています。教育には昔から関心があったんですよ。親が二人とも教師でしたし、大学の専攻も教育学でしたから。さ

らに個人的に研究するようになったきっかけは、上の娘が小4になるときに塾に入れたことでした。中学受験をさせると、親は数百万円ものお金を使い、本人は数年に及ぶ時間を消費する。そこまでの意味はあるのかと、多くの本を読みながら考え、「教育格差絶望社会」という本にまともな結論が。中学受験について調べてみると、受験と階層は密接に結びついています。子どもを私立に行かせるのは、中流が崩壊していく中で、子どもに「中の上」という立場を受け継がせるためです。有名私立に通う子どもたちと友だちになれる「権利」を買うために金をかけているんです。

僕は自分の階層や所持金を考え、娘は中学受験してもいなくても、人生がそう大きくは変わらないんじゃないかという結論を出したんです。でも上り始めたはしは外せず、娘は中学受験して新興進学校の豊島岡女子学園(東京)に入り、この春にお茶の水女子大に進みました。いま、子どもたちの階層を分けているのは、学校を好きであるかどうかという事です。私立中学や公立一貫校の子どもは多くは、学校を好きになれる。でも中流より下には、学校や教師を信用せず、嫌っている子どもたちが膨大に存在している。僕は、公教育にもっと金をつぎ込むべきだと思っています。例えば、公立の小学校や中学校に、本やマンガ、ゲームソフトもパソコンも何でもあって、自由に使えるようにする。給食も好きなものが自由に食べられる。そうすれば、学校が子どもの生活の中心になると思うんです。学力は後からどうにでもなる。公立の方がむしろ教師の質は高いし、いざとなれば塾だってある。まず学校を好きにさせる方が重要です。中学受験を全否定はしませんが、12歳で人生が決まってしまう社会とて、そんなに簡単に測れるものじゃない。自分の経験からもそう思うんです。(聞き手・尾沢智史)